

—— 港都横浜の意気を示す ——

横浜市開港記念会館（旧開港記念横浜会館）の装飾壁画について（3）

手塚恵美子*

7. 関東大震災

i) 開港記念横浜会館、開館6年目の試練

歓喜に沸いた1917（大正6）年7月1日の開館式の後、開港記念横浜会館は、横浜市初の、そして全国的に見ても最も早い時期の本格的公会堂建築として、数多くの催しの舞台となった。開館式後の会館利用第1号となった「市内製作品陳列展覧会」を皮切りに、講演会、音楽会、美術・工芸展覧会、市内企業主催の祝賀会・娯楽会・従業員慰安会・演芸会や会議、全国に先駆けて行われたバザー、同窓会、舞踏会——会館は実に多彩に利用された。特に、世界的バイオリニストのミッシャ・エルマン（1891-1967）、エフレム・ジンバリスト（1889-1985）、バレリーナのエリアナ・パヴロワ（1899-1941）、日本が生んだ世界的オペラ歌手の三浦環（1884-1946）、藤原義江（1898-1976）らの公演に人々は熱狂した¹⁾。市民が誇る近代的公会堂で繰り広げられた文化の香り高い企画や娯楽は、第一次世界大戦後の横浜の好況と相俟って、どれほどの華やきを街にもたらしたことだろう。

しかし、活気にあふれた日々は6年後に突如一変する。1923（大正12）年9月1日午前11時58分、関東一円をマグニチュード7.9の激震が襲った時、開港記念横浜会館では何が行われていたのか、誰がいたのか、その使用状況は分かっていない。その後5分の間に起こったマグニチュード7を超える2度の余震と、続いて市内各所で発生した火災が港都横浜を呑み込み、街を壊滅と呼べるまでに破壊していった。開港記念横浜会館は、赤煉瓦と白花崗岩の華やかな外壁の内部に鉄材が組み込まれ、高塔には特に堅牢な鉄骨が使われていた。そのおかげで、建物外郭と塔は倒壊を免れた。[fig. 41] だが市内中心部が火災で焼き尽くされてゆく中、会館も火の手を避けることはできず、建物内部と屋根・ドームは燃え落ち、和田英作らが創り上げた壁画・天井画も焼失した。



fig. 41 関東大震災後の開港記念横浜会館（左奥）

開港記念横浜会館の被災状況を示す写真には、無残な姿が留められている。構造的におおよその壁体は残ってはいるものの、高熱で針金細工のように歪められた屋根の鉄骨が、火災の猛威を物語る。[fig. 42] 内部の床も燃え尽きて失われ、1階から2階、さらに上空を見通すことができる。壁の化粧仕上げも炎に焼かれて所々下地の煉瓦がむき出しになり、1・2



fig. 42 震災後の開港記念横浜会館被災状況
屋根部写真
〔横浜都市発展記念館所蔵〕

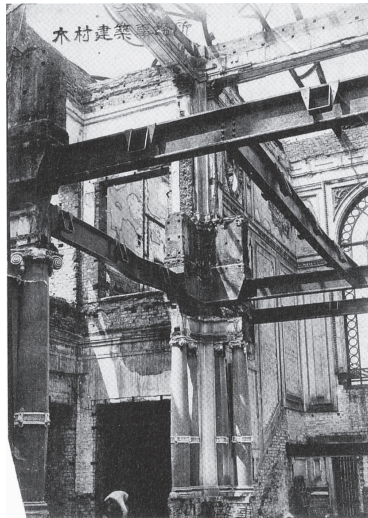


fig. 43 同上 1・2階広間、階段室周辺〔同上〕
右に見えるアーチ形大窓の左側上部壁面
には震災前、壁画「開港以前の横浜村」
があった。



比較参考 前稿(1) fig. 11 (部分) 再録
創建時會館の階段室2階部

階広間をつなぐ階段室の壁画があった壁面も激しく損傷している様子に胸が痛む。〔fig. 43〕

その同じ頃、東京では、和田英作が手掛けた交詢社の演芸室壁画（1908年）、帝国劇場の観客席上部天井画・食堂壁画（1911年）も同じ運命をたどっていた。建築に付随する建築装飾は、建築と命運をともにする。建築が災害で損なわれたり、取り壊されてその生命を終える時、ともに失われることが多い。装飾壁画・天井画の場合、幸運にも移設保存される例はあるにせよ、もとの装飾の機能は変容し、性格の異なる作品として別な命をつなぐことになる。和田英作は数々の壁画・天井画を手掛けたが²⁾、この後、第二次世界大戦時にも、建物の焼損とともに、岩崎彌之助高輪邸舞踏室の壁画・天井画（1908年）、東京駅皇室専用入口広間の壁画（1914年）も灰となり、原画を手掛けた慶応義塾創立五十年記念図書館階段室のステンドグラス（1915年）も破壊された。タブロー画とは異なる様々な苦勞の末に完成した大作の建築装飾が、震災・戦災である日一瞬にして失われていった時、和田英作はどう感じていただろうか。

ii) 会館復旧工事

震災直後、悲慘に焼けた内部を抱えながらも、開港記念横浜会館が瓦礫の中にすくと立つ姿は、奇跡のように見える。[fig. 41] ジャックの塔は、未曾有の困難にも屈するものかと毅然と背筋を伸ばしているようでもあり、一面焼け野原と瓦礫の山と化した横浜の街を見下ろして呆然と悲しみにくれているようでもある。震災を生き抜いた横浜の人々の様々な想いを代弁するかのようその姿は、やがて復興のシンボルとなり、未来への希望をつなぐものとなっていった。

震災後、閉館された会館は、しばらく剥き出しの屋根の鉄骨もそのままに、手つかずの状態で置かれていた。会館復旧にかかる費用の重さは、横浜市の復旧計画へ向けた腰の重さにつながっていたのだが、1924（大正 13）年 10 月、市側は「本市開港を記念するのみならず、市民協同の重要建築物を喪ふを遺憾とし」³⁾、1927・28（大正 16・17）年度の会館復旧費として、計 375,000 円を承認した⁴⁾。1925（大正 14）年 5 月に横浜市長となった有吉忠一（1873-1947）は、市の中心地である本町通りの一角に代表的建築物を残骸のまま置くことを良しとせず⁵⁾、2 年繰り上げて同年から 3 年計画で復旧計画が実施されることに決定した。

復旧工事は、大倉土木株式会社（現大成建設株式会社）が落札し、横浜市建築課が設計監理に当たった。1926（大正 15）年 6 月に着工、1927（昭和 2）年 5 月末竣工した。同時に和田英作の壁画も再興されたと伝えられるが⁶⁾、現在では壁画復元に関する記録は残されておらず、制作過程については不明となっている。

以下、1917（大正 6）年の竣工から関東大震災までの会館を「創建時會館」、1927（昭和 2）年に復旧工事が完了した会館を「復旧會館」、創建時會館の壁画を「オリジナル壁画」、復旧會館に復元され現存している壁画を「復元壁画」「現存壁画」と仮に呼び、会館内ステンドグラスについても同様に「オリジナル作品」「復元作品」として、しばらく論を進めてゆきたいと思う。

iii) 復旧會館の建築装飾—外観、内装、ステンドグラス

復旧された会館は、元通りというわけではなく、外観も内部意匠も大幅な変更を伴っていた。煉瓦壁に花崗岩の白縞が映える外壁とジャックの塔には、かつての華やかさが戻った。しかし、創建時の外観を特徴づけていた屋根のドームやドーマーウィンドウはなくなり、復旧會館には鉄筋コンクリート造の陸屋根が架けられた。[fig. 44] [創建時會館の外観は前稿 (2) fig. 20 を参照] 旭町通り側のドームがあった位置には、手摺子・欄干に壺形の装飾用植木鉢を組み合わせたようなコンクリート製の装飾が取り付けられたが、なぜこのようなデザインになったのか解釈に苦しむ。復元されなかった創建時會館の 2 階広間天井画 [前稿 (1) fig. 16、前稿 (2) fig. 25 参照] に見る手摺子・欄干・壺形の装飾用植木鉢などの形状に似ているようにも思えるが、復旧工事に関する「工事概要」などの資料は残されておらず、外観意匠に関する意図は明らかではない。創建時の姿に復さなかった理由は建築費の問題のほか⁷⁾、大小ドーム等で賑やかに飾り立てる屋根飾りが、時代遅れなものとされつつあった時勢も関係していたのかもしれない。いずれにしても、創建時會館の外観が「専ら勇健を旨として商工業栄進の意気を示さんことに努めたり」⁸⁾と意図した視覚的効果が、復旧時のデザインでは損なわれた印象は否めない。



比較参考 前稿 (1) fig. 16 (部分) 再録
創建時会場広間に張り上げられる前の天井画と制作者ら (1917年6月)



fig. 44 復旧後の開港記念横浜会館 昭和初期の絵葉書
[横浜都市発展記念館所蔵]



fig. 45 復旧後の開港記念横浜会館 2階広間 (1927年)
左手に階段室、右手に広間奥。右端に壁画「開港前の横浜村」が入ることになる額縁状の飾り枠の一部が見える。



fig. 46 同左 2階広間奥から階段室を臨む。
左壁面には壁画「大正期の横浜港」のための額縁状の飾り枠が既に設置されている。



fig. 47 同上 貴賓階段室のステンドグラス
《ポーハタン号》(1927年)

内部は、大規模な構造補強と連動する室内意匠となり、例えば2階広間は構造補強アーチが空間を特徴づけるものとなった。[fig. 45・46] 創建時に和田英作らによる円形油彩カンヴァス画が中央に張り上げられ、美しい漆喰彫刻で装飾されていた折り上げ天井は、平面的で簡素なものとなり、天井画は復元されなかった。イミテーション・マーブルの円柱・片蓋柱・腰板も再現されなかった。[創建時会館の2階広間は、前稿 (2) fig. 23

を参照]

そうした中、建築装飾の大きな見せ場となるステンドグラスは、デザインの変更を伴いながら、元の場所に復元された。貴賓階段室には「ポーハタン号」[fig. 47]、2階広間・控室の間仕切り部分には「開港当時不完全なる交通の状を記念」⁹⁾する大作 (以下、「開港当時の

交通」と略）[fig. 45] が、鮮やかに甦った。「開港当時の交通」2面は、ステンドグラス枠の形状が、オリジナルの長方形から、強度が高くインテリアに調和するアーチ形に変更された。その画面の一部が、手前の構造補強アーチに隠れる形となり、広間側からステンドグラスの絵柄全体を見られなくなってしまったことは惜しまれる。

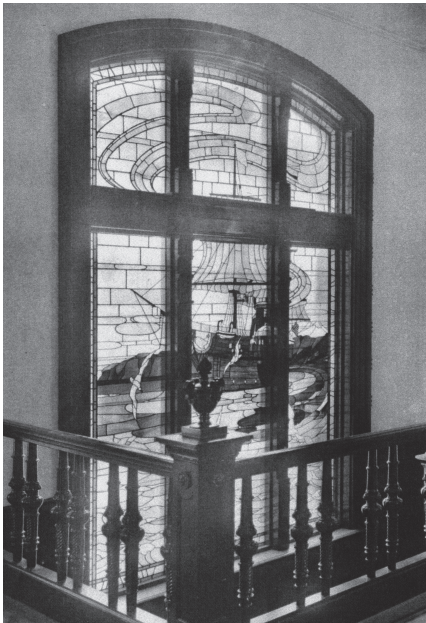


fig. 48 貴賓階段室のステンドグラス
《ポーハタン号》(1917年)



fig. 49 現在の中庭側中央階段（旧貴賓階段室）
のステンドグラス《ポーハタン号》
(1927年)

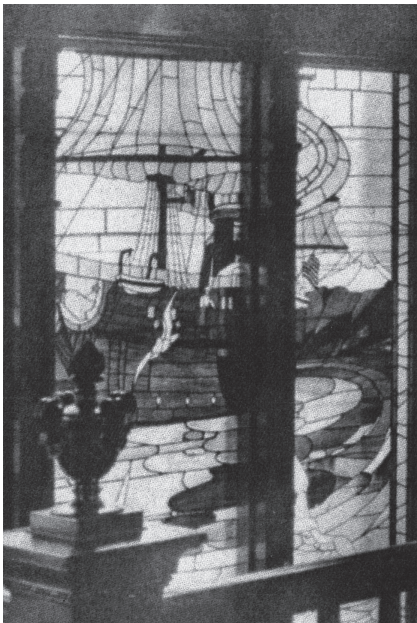


fig. 48 《ポーハタン号》(1917年)
部分拡大図



fig. 50 《ポーハタン号》(1927年)
部分拡大図

デザインの変更については、いくつか興味深い点が観察される。まず貴賓階段室のステンドグラス「ポーハタン号」は、オリジナル作品の意匠について、創建時会館の工事説明書で「開港の使命船にして米提督「ペルリー」の座せる「^{（マ）}ホーハッタン号」が威風堂々浪を蹴つて入港するの状」としていた¹⁰⁾。オリジナル作品の写真をみると、確かに煙をくゆらす外輪蒸気船ポーハタン号の前方マスト上部には帆が張られ、入港後間もない風情とも見える。[fig. 48、fig. 48 部分拡大図] 一方、復元作品では、前方マストの帆はたたまれ、船尾には長く縄梯子が垂れて、その下に数名の人影を乗せた小舟が浮かんでいる。[fig. 49、fig. 50] 左斜めからオリジナル作品を写した写真 [fig. 48] の角度を考えると、木枠の陰の見えない部分に縄梯子と小舟が小さく描かれていた可能性もないではないが、工事説明書の通り「浪を蹴つて入港する」ところを描いているなら、やはりこれらはオリジナル作品にはなかったモチーフと考えられよう。ステンドグラス復元時には、ペリー来航以降、数多く制作された黒船来航絵巻などを参考に、アメリカ兵の乗る短艇（バッテリー）が描き加えられたのかもしれない¹¹⁾。あるいはそれは日本側からの使者を乗せた小舟だったのかもしれないが、そのモチーフによって、開港へとつながってゆく両国の交渉の始まりが想起され、「開港記念」の意味が強められているように思う。

2階広間に復元されたステンドグラス [fig. 45、前稿 (1) fig. 4] は、「開港当時の交通」の対作品についてはオリジナル作品 [前稿 (2) fig. 23] の構成を踏襲し、向かって右側に陸運、左側に水運が表現された¹²⁾。それら2面の間の扉上には、オリジナル作品では、帆船をデザインしたと見える小さな丸窓



fig. 51 2階広間ステンドグラス「鳳凰」(1927年)

が置かれていたのだが、それが復元時には大幅に変更され、半円形アーチの中に横浜市の徽章ハママークを載いて向かい合う「鳳凰」が表現された。[fig. 51] 創建時会館の貴賓室には、高貴な来賓を迎える部屋にふさわしく、木象眼による鳳凰が天井を飾り¹³⁾



fig. 52 創建時会館の貴賓室（現特別室）天井 (1917年)
折り上げ部分に見える「開港記念横浜会館」の掲額は公爵徳川家達揮毫による。



fig. 53 創建時会館の貴賓室（現特別室）窓掛・緞帳 (1917年)

[fig. 52]、窓掛上部の緞帳にも鳳凰が向かい合うようにデザインされていた [fig. 53]。それらは会館復旧時の貴賓室には再現されなかったが、新たに復旧会館の2階広間に加わった「鳳凰」のステンドグラスは、創建時の貴賓室から抜け出てきたようでもあり、新たに復興のシンボルとして生まれ変わり、横浜を守護しながら不死鳥のように羽ばたいているようにも感じられる。

創建時のステンドグラスは、「宇野澤組ステインドグラス製作所」が手掛けたとの記録があるが、実際には「宇野澤ステインド硝子工房」の可能性があり、会館復興時の復元作品（1927年）の制作も同工房とされる¹⁴⁾。しかし、オリジナル作品、復元作品のいずれも原画制作者は分からず、実際ステンドグラス制作に当たった個人名もはっきりしない。ただ原画・実作品とも相当な技量の持ち主であったことは確かで、「ポーハタン号」の優美な美しさ、「開港当時の交通」のユーモアを交えた温か味は、今も大きな魅力となって見る者を迎えてくれる。謎多きステンドグラスだが、筆者は原画作者が和田英作だった可能性も視野に入れつつ調査研究を続けて行きたいと考えている。ステンドグラスの話題が長くなったが、話を本題の装飾壁画に戻そう。

8. 縮小復元された現存壁画（1927年）

i) 開港記念横浜会館の再開

1927（昭和2）年度、横浜市三大事業と呼ばれた、横浜港の船舶係留面積拡張のための大防波堤築造、臨海工業地域設定のための埋立事業、市域拡張が着手され、「大横浜建設」がスタートした¹⁵⁾。それを記念し、開港記念日の6月2日には、大横浜建設記念式が開港記念横浜会館で挙行された¹⁶⁾。この時が震災から4年を経て復旧工事を完了した横浜会館の御披露目となった。式典は、三大事業を活用して「横浜市発達」という目的達成へ向けて「大なる意気を示す意味」を持つものだった¹⁷⁾。同時にそれは横浜市の震災復興事業が着々と進んで大半が達成されたことを祝う節目ともなり、当日は特に秩父宮雍仁親王（1902-1953）が「全市の新しく明るき復興状況」を御視察され、「記念式にも御台臨を給はること」となった。当時は大正天皇崩御後の服喪期間であったため、式典は華美を避けるものとなったが、「市民の鬱勃たる英気と、洋々たる前途の希望に燃えたと、殿下の御台臨を辱うせるとにより、内外貴紳の参会を得て盛況を極めたり」¹⁸⁾と、1,700名もの来賓を迎えた横浜会館は、大きな喜びで満たされた。

再生復活を果たした横浜の新たな大発展へ向けた記念すべき式典が、横浜復興の象徴となった横浜会館で開催され、会館は震災前と同様に横浜市民の公会堂として再開された。しかし当時の新聞報道では、1917（大正6）年の創建時とは打って変わって、会館の建築そのものについてはあまり触れられていない。記念式当日の『横浜貿易新報』は、光輝を重ねてきた横浜開港記念日に、「畏くも秩父宮殿下の台臨を仰ぎ奉り、大横浜永遠の歴史的記念の式典が挙行せらるる事は、真に歓天喜地、横浜市民の光栄と祝福とは亦他に比すべき何物もない」と最大限の祝意を述べた。そして式典会場となった会館については、竣工までの道のりを簡略にたどり、最後に短く「尚、同館広間には和田英作画伯の壁画揮毫を依頼してあるがまだ着手されない」と伝えている¹⁹⁾。この華やかな祝賀の日、既に壁画が飾るべき壁面に額

縁状の飾り枠は設置されていたが、内部は空白のままで和田の揮毫が待たれていた。
[fig. 45・46]

ii) 謎に包まれた壁画の制作経緯

その前月、『横浜貿易新報』は「岡田画伯の壁画と徳川貴族院議長の横浜開港記念会館の揮毫方を依頼してあるが六月二日の記念式までには間に逢はないと」と報じていた²⁰⁾。引用文中筆者が傍点を付した「岡田画伯」は、もちろん「和田画伯」の誤報で、近い洋画家・岡田三郎助(1869-1939)や同じ苗字の和田三造(1883-1967)と和田英作は、当時しばしば混同されることがあった。会館創建時に貴賓室の掲額[fig. 52]に筆を下した公爵徳川家達(1863-1940)²¹⁾に再度依頼した「横浜開港記念会館の揮毫」も、和田の壁画と同様、「記念式までには間に逢はな」かった。そして、これらがその後いつ完成されたのか(徳川家達の揮毫については実現されたのかどうかすらも)、今となっては不明となっている。

1927(昭和2)年当時、確かに和田は非常に多忙な日々を送っていた。東京美術学校教授としての校務は言うに及ばず、5月頃には関東大震災時の摂政宮(のちの昭和天皇)による山本権兵衛震災内閣組閣を題材とした記録画揮毫の打診があり、7月に正式な御下命があった。一方で、聖徳記念絵画館に納める《憲法発布式》の制作も待たれていた²²⁾。8月には、帝国美術院の院長・福原鎌二郎(1868-1932)の独断的運営に異を唱えて、同院会員だった和田は辞表を提出、波紋を呼んだ。その後の流れの中で辞意は撤回するが、彼の批判的行動は、帝国美術院改革へ向けて大きな一石を投じることになった。10月には黒田記念館建設事業が着工、恩師黒田清輝(1866-1924)を顕彰する記念建造物とあって、和田はこの事業に委員として関わっていた。

また、前稿(1)に述べたように、会館創建時の壁画・天井画(1917年)では二人の東京美術学校卒業生が制作助手をつとめていた。会館復旧の頃、そのうちの一人、安藤東一郎は東京にいたが²³⁾、有田四郎は遠く宮崎へ去っていた²⁴⁾。縮小復元壁画の制作に際して、再び彼らの助力を得ることができたのか否かについても不明である。

日本のステンドグラス史研究家の田辺千代氏よりうかがったお話では、同氏が横浜市開港記念会館のステンドグラスを調べていた1980年代後半(昭和60年代)頃、会館に関心を寄せていた方々の間では、壁画に関してよく知られた伝聞があったという。それは、会館復旧時に和田英作へ壁画を描くよう頼んでいたが、多忙な彼はカンヴァスにきちんと描く時間がなく、ある時、彼自身が会館へやってきて直接壁に描いた、というものだった。和田英作が手掛けた壁画・天井画は、知られている限りではカンヴァス油彩画を張り上げる方法が採られているので、もし伝聞の通りだとすると、かなり例外的な制作となる。

しかし、美術保存修復センター横浜の大西章夫氏のご教示によると、現存壁画の観察からは、やはり支持体はカンヴァスであり、額縁状の飾り枠の内側に油彩カンヴァスを張った後に、ライナー(額縁の内側の枠)を取り付けているのが見て取れるとのことであった。現存壁画は、オリジナル壁画と同様、油彩カンヴァスを油性糊料で張り上げるパンチュール・ド・ラ・マルフレールと考えて良いだろう²⁵⁾。

壁画は、後に述べるように、1970年代頃に修復され、保護のためのガラスケースがかけられた。その際の修復記録も、ガラスケース設置の経緯の記録も残されておらず、当時の事

情を知る方も横浜市の会館関係者周辺には、もう見つけることができなくなっている。現時点で復元壁画の制作経緯を解き明かすことができなかったのは非常に残念だが、他日を期したいと思う。

iii) オリジナル壁画（1917 年）と縮小復元された現存壁画（1927 年）の比較

ともあれ、1917（大正 6）年の会館創建時に、1 階・2 階の広間をつなぐ階段室を飾った壁画は、復旧会館では 2 階広間奥へと設置場所が移され、サイズも大幅に縮小された。その理由に関する資料も残されていないが、装飾費予算の問題や、建物の構造・内装との調和の問題、壁画装飾に対する考え方の変化、壁画の設置環境などが考えられる。

会館創建時のオリジナル壁画のサイズは、前稿（2）に記したように、当時の記録の尺貫法による寸法をメートル法に換算すると、「開港以前の横浜村」が約 173×415 cm、「大正 6 年の横浜市」が約 173×647 cm の大画面であった²⁶⁾。縮小復元された壁画は、それぞれに対応する現存作品「開港前の横浜村」〔前稿（1）fig. 9〕が 75×198 cm、「大正期の横浜港」〔前稿（1）fig. 10〕が 75×268 cm である。オリジナル作品の尺貫法によるサイズは不正確な部分があるが、縮小復元された現存壁画と比較すると、ごく大雑把な計算で寸法の縮小率は 5 分の 2 ほど、面積は 5 分の 1 ほどとなろうか。



前稿（1）fig. 10 再録 「大正期の横浜港」（1927 年）

ちなみに、本稿におけるオリジナル壁画と復元壁画の仮題の違いは、当時の資料を参照した呼称と、現在の会館の説明に見られる表記の違いで、作品の正式名称は定まっておらず、資料により呼び方も一定していない。今後、横浜市および会館関係者によって共通認識が示されるようになると良いと思う。

壁画の図様については、現存壁画「開港前の横浜村」の沼地の形状は、会館創建時に発行された記念絵葉書の図版〔前稿（2）fig. 28・31〕、『開港記念横浜会館図譜』（清水組横浜支店、1917 年）の表紙図版〔前稿（2）fig. 19・32〕と類似しており、手前の木々の形状は同『図譜』所収の「二階広間及階段室」の壁画〔前稿（1）fig. 11、同（2）fig. 33〕に近い。

現存壁画「大正期の横浜港」〔前稿（1）fig. 10、本稿に再録〕は、オリジナル壁画の図様を伝える記念絵葉書の印刷図版〔前稿（2）fig. 34〕と比較すると、構図・モチーフは踏襲されている部分も多いが、画面サイズの縮小に伴って建物の数を減らし、それぞれの建築的特徴はやや単純化されている。幾何学的な形態がリズムミカルに繰り返され、結果として、全体的にまとまりを持った街の景観が形づくられた。それが画面左側から射す夕暮れのオレンジ色の光に染まり、工場の煙突から幾筋も伸びる柔らかな煙と相俟って、詩情を醸し出している。現在では山手の丘から見下ろす街の景観は全く変わってしまい、立ち並ぶ高層建築

に隠されて港も見ることではできなくなりましたが、今も夕暮れ時に壁画と同じ方向から夕陽が射し、ビル群の西側の壁をオレンジに染めることに変わりはない。復元壁画に見る煙突の煙は、港からの柔らかな風に吹かれて一様に緩く左側へたなびいて、統一感を醸すのに一役買っている。オリジナル壁画の煙が上へまっすぐ立ち昇っていたのに比べて、穏やかな動きが感じられ、それが背景の夕陽に輝く雲の水平方向の連なりと好対照をなして、画面に活気を与えている。人物は描かれていないが、人の営みの活力と温かさが伝わってくるような趣がある。

大きな変更点として目立つのは、画面を縦に区切るように、前景左側に桜の若木と思しき一本の樹木が大きく描かれていることだ。オリジナル壁画にはなかったこの樹によって、眼の前の絵に描かれた光景が空から見た鳥瞰図ではなく、樹が根を張る丘から見下ろしている景色だという感じが出ている。言い換えると、オリジナル壁画の空から見ているような、普通の人間にとっては非日常的な視点ではなく、小高い丘へ足を運べば誰もが見ることのできる日常的なスケールの風景という親しみを感じさせる。

だが、縮小復元壁画に樹木を描き加えたことには、何かそれ以上の意味があったようにも思える。前稿(2)で述べたように、オリジナル壁画「大正6年の横浜市」の揮毫を担当した有田四郎は、山手のフェリス和英女学校でスケッチを重ねて構図を練り上げた²⁷⁾。緑に彩られた美しい校舎で知られたフェリスの丘 [fig. 54] も、関東大震災時には猛火に焼けただけ、一時は悲惨な姿を見せていた。[fig. 55] しかし学校が徐々に復旧してゆくのと同時に、まばらだった校舎の周辺の木々もやがて甦り [fig. 56]、校庭からは横浜が「あらゆる苦難



fig. 54 吉浜橋付近より丘の上のフェリス和英女学校を臨む 明治期
[横浜開港資料館所蔵]



fig. 55 震災後の焼けただれたフェリスの丘
1923年 [フェリス女学院資料室所蔵]



fig. 56 震災後の仮校舎
[フェリス女学院資料室所蔵]

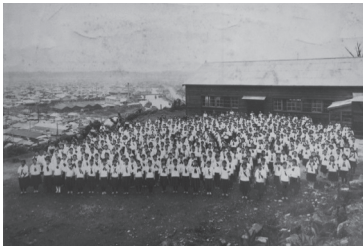


fig. 57 フェリス和英女学校校庭の仮校舎前に整列した女子学生たち
1925年
[フェリス女学院資料室所蔵]



fig. 57 部分拡大図 フェリスの丘から見下ろした1925年の横浜の街の復興の様子

と闘いつつ歩一步一步と復興へ、更に理想の都市へと確実にその歩を進めて」いる様子を見下ろすことができたという²⁸⁾。[fig. 57、fig. 57 部分拡大図] それは希望に満ちた光景であったに違はなく、壁画に描かれた若木と芽吹いた若葉には、山手の丘に甦った緑に重ねて、制作者の心情も込められていたのではないだろうか。震災後に早期復興を果たして大正時代の繁栄を取り戻し、さらに未来へ向けて大発展をとげてゆこうとする昭和初期の横浜への、希望と願いが込められていたのではないかとも思われるのである。

9. 壁画が伝える昭和・平成の横浜市民の意気

i) 第二次世界大戦と戦後——開港記念横浜会館から横浜市開港記念会館へ

震災復興を遂げた横浜に再び大きな試練が訪れたのは、第二次世界大戦中のことだった。横浜は度重なる爆撃を受け、特に1945（昭和20）年5月29日の大空襲では、東京大空襲を上回る爆弾・焼夷弾が投下された。数千人から1万人を超えるとも言われる市民が亡くなり、市内中心部は炎上して壊滅的な打撃を受けた。しかし開港記念横浜会館は、この戦火をもくぐり抜けて、1928（昭和3）年に新築された第4代目の神奈川県庁舎（キングの塔）、1934（昭和9）年竣工の第3代目横浜税関庁舎（クイーンの塔）とともに、焼失を免れた。

だが終戦後、焼けずに残った市内20ヶ所のビルとともに開港記念横浜会館も進駐してきたアメリカ軍に接收される。この接收期間中には、ひとつの伝説的なエピソードがある。終戦後、アメリカ軍がやってくるとの噂が流れると、館内のステンドグラス「ポーハタン号」と和田英作の壁画には、ベニヤ板で覆いがかけられた。戦時中、「ポーハタン号」の船尾に掲げられた星条旗の上には、赤インクで日の丸を描いた紙が貼られていたが、ベニヤ板で覆う直前、誰かがその日の丸をはがした。接收後、ベニヤ板の下から現れた「ポーハタン号」の星条旗をアメリカ軍将校が見て、感銘を受けたというのである²⁹⁾。あるいは、星条旗が視察に来たGHQ高官の眼にとまり、戦争中も敵国の旗を大事にしていたと心動かされて、接收中建物の改修に手を付けさせなかったという逸話も伝わっている³⁰⁾。ことの真偽は定かではないが、ステンドグラスと壁画に危害が及ぶ可能性を想定して、ベニヤ板で保護して守ろうとする動きがあったことには、これらに重きを置いていた当時の人々の想いが垣間見られる。横浜の歴史を記念する作品を何とか自分たちの手で保護しようとした意気とともに、今それらを見られることの貴重さをあらためて感じる。

1958（昭和33）年6月30日に会館が返還されると、横浜市はただちに改修工事に入った。

翌1959（昭和34）年一部利用が再開され、1960（昭和35）年には全面的開館となって、身近な公会堂として横浜市民の手に戻った³¹⁾。1959（昭和34）年、開港記念横浜会館の名称は、横浜市開港記念会館へと改称されている。

その同じ年の1月3日、和田英作は84歳でこの世を去った。会館の復元壁画を手掛けた後、1932（昭和7）年から1936（昭和11）年には東京美術学校校長をつとめ、1934（昭和9）年帝室技芸員を拝命、1943（昭和18）年には文化勲章を授与されるという、栄光に彩られた芸術家人生であった。和田英作の名も業績も、今では広く知られているとはいえないかもしれないが、横浜市開港記念会館の壁画は、かつて活躍著しかった和田の壮年期の足跡を現代に静かに伝えている。

ii) 開港記念会館の存廃論

和田英作没後10年が過ぎた1969（昭和44）年、彼が残した壁画の保存問題に端を発して、開港記念会館の建築そのものの保存をどうするかという問題が提起された。『神奈川新聞』紙上には同年9月2日より「保存か取りこわしか 岐路に立つ開港記念会館」とのタイトルで連続特集記事が組まれ、各界識者の意見が掲載された。それとともに、市民からも意見が寄せられ、議論が交わされた³²⁾。

一連の保存問題の発端は、ある日、当時の市長・飛鳥田一雄（1915-1990）のもとを、太平洋美術会神奈川支部の事務局長をつとめた画家の八幡港二氏が訪れ、「開港記念会館に和田英作の絵のあることをご存知か」と尋ねたことだった。「あることは知っているがあまり記憶は確かではない」と飛鳥田市長が答えると、「それがいま保存が悪いためにだめになりそうなのだ」と八幡氏は「真剣そのもの」であったという³³⁾。

1932（昭和7）年横浜に生まれた八幡港二氏は、本稿を記している2014（平成26）年現在も横浜市内で創作活動を続けておられ、本稿の調査研究の過程で、当時のお話をうかがうことができた³⁴⁾。八幡氏は20代の頃、開港記念会館へ時々出入りしていた際に、和田英作の壁画がとても傷んで、絵具が剥がれそうになっていたことを心配していたという。今では、いや当時でさえ一般に和田英作を知る人は多いとは言えなかったが、有名な画家であり、壁画について「いい絵だし立派な仕事だと思った。あれだけの仕事をしている人は、当時、自分の周りにはいなかった。尊敬していた」と八幡氏は語られた。それで、八幡氏ご夫妻の仲人だった飛鳥田市長へ「直した方がいい」と話したのだという。八幡氏の知己であった、横浜生まれの詩人で横浜市民ギャラリーの初代館長もつとめた山田今次（1912-1998）も壁画について、「あれは保存しなければいけない」と言っていたという。

その後早速、飛鳥田は友人で横浜出身の東京藝術大学助教授（同年教授）・寺田春弐（1911-1979）に壁画を見てもらう約束を取りつける。寺田は、ちょうどその頃委託されていた赤坂離宮（現迎賓館赤坂離宮）の壁画・天井画修復計画のための準備調査で多忙な中、開港記念会館を訪れ壁画を調べた。山田今次も同席した場で、「あの絵をどう思いますか」と問う寺田へ、飛鳥田はしばし考えたのち「重要文化財に指定すべき絵ではありませんね」と答えた。芸術的価値という点では、という意味だったのだろう。それを受けて、寺田は「その通りですが、その画材が明治後期から大正初期の横浜ですから、保存すべき値打ちは十分でしょう。ところが、あの絵は当時のやり方として壁にはめ込まれていて、もう洗ってうわ

薬をぬるぐらいでは持ちますまい。壁ごと修理しなければなりませんよ。赤坂離宮と同じです」と応じた。さらに寺田は、「いったい飛鳥田さんは開港記念会館をどうなさるおつもりですか」と、次なる問題を口にした。建物を保存するのか、取り壊して新しいビルを建てるのか、市の方向性を決めた上で、和田英作の絵の保存をどのようにするか決めるべき、というのが寺田の意見であった。「さあ、そうすると、いくら市長でも独断はできない」「開港記念会館はどう扱うべきか。歴史の短い都市《よこはま》にわずかに残されたこの建物は三溪園や外人墓地とともに保存すべきものなのだろうか。私はこれを市民に問うことにしようと思う」、と飛鳥田より問題提起がなされた³⁵⁾。

『神奈川新聞』紙上の関連記事³⁶⁾には、飛鳥田が考える開港記念会館問題の方向性として、1) 補修を続けながら現状を保存、2) 取り壊して新しいビルを建設、3) 解体移築、の3通りが示された³⁷⁾。第一の補修・現状保存については、相当大規模な補修工事を行なわなければ長期の耐用年数を確保できず、「仮にそのつど補修工事を行なっても、館内にある和田英作の絵をどう保存するか難問が残る」、つまり上述の寺田の意見を受けて、「いまや会館自体をどうするかを決めねば、絵の保存も困難」であることが、広く市民に知られることとなった。第二の「取り壊し」については、「建築学上ではとくに取りたてて注目すべきものがない建て物であるとしても」（という記事の前置きに今となっては驚かされるが）、横浜市民の寄付で建設され、市民とともに50年の歴史を刻んできた建物だけに、「取りこわすには、市民の意見や考えを根本にしたい」という飛鳥田の心境が示された。第三の解体移築には莫大な費用がかかり、財政的にも市政運営の点でも余力は見込めなかった。

飛鳥田の問題提起に続いて『神奈川新聞』の連続特集記事には、各界を代表する識者11名の意見が紹介された。

寺田春弐は、「市歌にもある苦舎の煙からポート・ヨコハマを語ってくれる一つのよりどころとなるように、外観は変えずに内部改造」を行い、「市民の文化的研修の場」や「市の常設美術館」とすることを提案した。そして「あの塔のあるレンガ積みの姿は次代に引き継ぐべきだと思う」と述べた³⁸⁾。前述のように、寺田は飛鳥田に対して壁画の「画材が明治後期から大正初期の横浜」であるから「保存すべき値打ちは十分」と語った。その時、寺田の胸には、壁画も建物と同じく、開港前の「苦舎の煙」から発展を遂げた港都横浜の歴史を語る「一つのよりどころ」として重要であり、次代に引き継ぐべきであるとの思いがあったのだろう。

横浜商工会議所会頭・李家孝は、「建て物を見るたびに先人の刻苦精励のわが国繁栄への基礎貢献をしのぶことこそ少年教育の基盤となるものと思う。一片の感傷的な発想ではないのである。都市の近代化も必要であろうが、文化的な財産を守ることに熱心な人たちの存在も尊いのである」と述べた。そして日本の開港に関する記念博物館などとして活用することを提案し、外観はそのまま残して内装を定期的に改装、100年、200年後までも残るように近代化してゆくことを提案している³⁹⁾。横浜商工会議所観光部委員会も「取りこわしは絶対反対」との立場を表明、飛鳥田市長に申し入れを行った。「同館は大震災や戦災にも耐えてきた建て物で、わが国開港の記念すべき存在。感傷でなく、同館の持つ歴史的・文化財的な意義からも反対する」とし、「外装はそのまま保存し、内部を現代の建築技術の粋を集めて改修し、映画、演劇、音楽会あるいは講演会・講習会など市民の文化・教養の向上により一

層役立ててほしい」と注文をつけた⁴⁰⁾。

このほか、保存賛成派の意見としては、やはり今の場所に外観は変えずに、内部を改装して別な用途に使用する——例えば、市民文化活動センター、「まち造り」資料・PRセンター、博物館、美術館、として活用という考えが多く見られた。

一方、保存反対派の意見では、声楽家・佐藤美子は会館に愛着は感じながらも、新たに音響効果の良い音楽堂の建築を希望し、「それはまた、その昔、文化のさきがけだった、ミナト横浜の伝統にもつながる」と語った。童話作家・平塚武二は、次代のために既存会館を取り壊し、近代都市にふさわしい新開港記念会館の建設を提案した。

市民からも賛否両論の声が『神奈川新聞』の「自由の声」欄に寄せられた⁴¹⁾。保存反対の立場からは、「建て物として寿命がきているなら、とりこわすべきだと思う。〔…〕その建築的、史的価値については精密精巧な模型を製作し、和田画伯の作品は切りとるか模写して永久保存の手段をとればいい」、あるいは「私たちハマっ子は、感情のうえでは残しておきたいと思いますが、感情を超越して、時勢を考え、また市の経費の点も考えて、思いきってあの煉瓦の建て物と決別すべき」といった意見が見られた。

一方、賛成意見としては、「すべてのものを新しくしなければ気のすまぬという風潮の多い昨今ですが、先人がどんな思いで開港記念会館を建てたか、静かに思いをはせるべきでしょう。〔…〕ハマの中心の一つぐらい市民の心のよりどころとする開港記念会館を保存することはハマの誇りであり、むしろ近代化の中に先人の足跡を残すことこそハマ人の心の豊かさを示すものと思います」、あるいは「取りこわしなどもってのほかだ、〔…〕費用が問題なら、記念会館保存会をつくろう。市民運動にして〔…〕市民の手で開港記念会館を保存したい。〔…〕横浜開港は日本の夜明け、その記念のシンボルとして館の保存は当然だ」といった声が聞かれた。

その後の紙面では、和田英作の壁画が記念会館の存廃論議につながった経緯を再び取り上げた。建築の一部に嵌め込まれている絵を壁から取り出すには、建物の大改修と同程度の経費と時間がかかり、その場合も絵が無傷とは限らず、会館自体も大改修が必要な時期に来ている⁴²⁾。そこで「とりあえず市では保存が悪くてだめになりかけた絵に薬剤を塗るなどの方法で応急手当し、急場をしのぐことになった」のだが、そうした処置を施しても「絵はとうていわずか数年の寿命でしかない」と考えられた。その間に市民の議論が尽くされることを市長は望んだのだが、これを受けて横浜市民の関心は高まり、様々な意見が寄せられた結果、保存論が反対論より優勢となった。横浜開港の意義と、一寒村の横浜村から港都横浜への隆盛の歴史、その横浜の発展を支えた先人の足跡を記念する会館の価値が問い直され、最終的に外観も公会堂としての機能も変わらぬまま保存されることとなった。建物保存のきっかけとなり、建物と同様の意味と価値を持つ和田英作の壁画も、こののち本格的に修復され、保護のための木枠ガラスケースが設置されて現在にいたっている。

iii) 開港記念会館をめぐる平成の「意気」

ところで、創建時の会館に関する図面は、震災時に焼失したと思われていた。しかし、1985（昭和60）年、会館の創建および震災復旧工事に携わった横浜市建築課技師・木村龍雄氏の次女・城千代子氏のもとで保管されていたことが明らかとなり、その後横浜市に寄贈

された。それを機に、開港記念会館のドーム復元事業が動き出す。それは、1989（昭和64／平成元）年に市政100周年・開港130周年を迎えるのを記念して、「同会館を創建時の姿に戻し、大切な市民財産として再生保存を図ろうとするもの」であった⁴³⁾。「創建時の姿」に戻すことは、繰返し述べてきた「横浜開港記念たるの点に留意し専ら勇健を旨として商工業栄進の意気を示さんことに努めたり」⁴⁴⁾という建築外観に込められた意図の「再生」でもあった。そしてその意図は、壁画に込められたメッセージと呼応するものでもある。ドーム、ドーマー・ウィンドウ、小塔が、大小の波のように繰り返されて、ジャックの塔を引き立て、垂直方向への上昇感を演出する効果が復されることで、活力に満ちた横浜隆盛の意気が、再び視覚的高揚感となって伝わってくる。横浜市開港記念会館は、屋根及びドーム復元工事が1989（平成元）年5月竣工したのち、9月2日、国の重要文化財に指定された⁴⁵⁾。以来、「大切な市民財産として再生保存を図ろう」とした平成の横浜の意気は受け継がれ、今日にいたって開港記念会館の存在感と魅力は、さらに大きく発信されようとしている。

結びに代えて

近年、キング（神奈川県庁）、クイーン（横浜税関）、ジャック（横浜市開港記念会館）の三塔は、歴史的モニュメントとして、また地域を象徴し活性化する観光資源として、存在感を増してきている。2007（平成19）年には、語呂合わせで3月10日が「横浜三塔の日」とされ、以来、その記念日に横浜市中区では様々なイベントを開催している。三塔を一望できるスポットを巡ると願いが叶うという都市伝説も生み出され、「横浜三塔物語」として地域から発信されている。2014年秋には、横浜三塔を愛する方々が中心となり、「横浜三塔協議会」が発足したとの報が流れた。今後、「横浜三塔」のブランド化を目指し、周辺地域の活性化を目指していくという⁴⁶⁾。

キングの県庁舎とクイーンの横浜税関が「官」の建物であるのに対して、ジャックの開港記念会館は、もともと市民の寄付で建設された「民」の建物であり、近代建築に関心のある横浜市民が感じる親しみと愛着も強いと言われる。これまで見てきたように、三塔の中で最も長く横浜の発展と激動の歴史を見守ってきたモニュメントでもある。会館は、度重なる大小修築工事を経て、大切に守られ使い続けられてきた。館内ステンドグラスも、中庭側中央階段（旧貴賓階段室）の「ポーハタン号」は1978（昭和53）年に修復され、2階広間を飾る「横浜開港時の交通」も横浜開港150周年記念事業の一環として2009（平成21）年に修復されて、輝きを取り戻している。

しかし、2階広間の和田英作の壁画に関しては、会館存廃論の後、最後に修復が施され保護のための木枠・ガラスケースで覆われた際の記録は残されておらず、誰がどのような修復を行ったのか、ガラスケースがどのような経緯で取り付けられたのか、今となっては関係者の間でも分からなくなってしまっている。壁画が保護処置を施されたのち、本格的に修復されたと考えられる1970年代頃から、2014年の現時点まででも、既に40年ほどが過ぎている。現在、ガラスケースの下絵画の状態は、特別差し迫った問題があるようには観察されないのだが、だからといって予断は許されない。絵の状態については、開港記念会館ガイドボランティア団体のジャックサポーターズ、地元横浜の修復専門家の方々も、クリーニングや修復が必要な時期にきているのではないかと懸念されている。壁画を覆うガラスケースは

壁に密着して固定されており、開閉することも、簡単に取り外すこともできない。それで、絵の状態を詳細に調べることができず、小さな通気孔からケース内に侵入した埃を取り除くこともできずにいる。また、保護ケースに使われているのが、現在広く使用されるようになってきている無反射ガラスではないため、部屋の照明がガラス表面に映り込んで、絵の鑑賞の大きな妨げとなっている。[前稿(1) fig.7・8] こうした諸問題について、予算など難しい課題は多々あろうが、関係諸機関には一考をお願いしたいと思う。

創建时会館の装飾壁画は、建物と同様、港都横浜の勇健な商工業栄進の意気を示すものとして構想され、震災で失われたのち、復旧会館にその意義を継承して縮小復元された。昭和後期の保存問題を経て、横浜の歴史的遺産と文化財を大切に守ろうとする横浜市民の意気を示すエピソードが、現存壁画の歴史に加わった。壁画は装飾的機能や芸術的価値よりも、そうした横浜の歴史を幾重にも語る絵画としての価値を湛えている。その経緯に思いを馳せ、国際的貿易都市としてだけでなく、産業・商業・文化・住環境などあらゆる面で発展を続ける横浜の今後へ向けて、先人の意気を長く伝え次世代へつなげるものとして、壁画が良い状態で保存されてゆくことを願わずにはいられない。

註

- 1) 開館後の開港記念横浜会館の利用については、次の文献に詳しい。
『霧笛と共に 横浜市開港記念会館史』横浜市開港記念会館史刊行委員会編・発行、1989年。
秋山佳史「時計台80年 開港記念会館物語 ①～④」『神奈川新聞』1998年9月21日～12月30日連載記事
(本資料は横浜市開港記念会館館長代行・山口達夫氏よりご教示いただいた。)
- 2) 前稿(1)、p.258(65)を参照。
- 3) 『横浜復興誌』第4編、横浜市役所、1932年、pp.465-466。
- 4) 『横浜市開港記念会館ドーム復元工事報告書』横浜市建築局建築部編・発行、1990年、p.13。
- 5) 『横浜貿易新報』1927年6月2日、第1面。前掲『霧笛と共に 横浜市開港記念会館史』、p.70も参照。
- 6) 前掲『横浜市開港記念会館ドーム復元工事報告書』、p.14。
- 7) 前掲『霧笛と共に 横浜市開港記念会館史』p.70では、「インフレが進んでいたため、銅製のドームは省略され、装飾もやや簡略化された」としている。
- 8) 前稿(2)p.348(67)を参照。
- 9) 『開港記念横浜会館建築工事説明書』『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年。
- 10) 同上。
- 11) 全国各地に残されている黒船絵巻については、『ペリー来航と横浜』横浜開港資料館編・発行、2004年に詳しい。同書p.5所収『黒船来航画卷』に描かれた「ポーハタン号」の舷側にも短艇(バッテリー)を見ることができ、同頁の短艇のみを描いた絵とともに、ステンドグラスに表現された小舟につながる雰囲気を感じられる。
- 12) ステンドグラスのモチーフの意味については、前稿(2)pp.345(70)-343(72)に論じた。
- 13) 『開港記念横浜会館』『建築雑誌』第367号、1917年7月、p.81(583)。
- 14) 『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年11月、に記載の工事関係者として「硝子」の欄に「宇野澤組ステインドグラス製作所」とある。
これに対して、日本のステンドグラス史研究の第一人者である田辺千代氏は、関係者の体験談から、オリジナル作品(1917年)を製造したのは正しくは「宇野澤ステインド硝子工場」だったのではないかと推測されている。増田彰久写真・田辺千代文『日本のステンドグラス 宇野澤辰雄の世界』白揚社、2010年、p.80。
また、ステンドグラス復元作品(1927年、現存)については、横浜市発行の同作品修復報告書において、参照資料は不明ながら「宇野澤ステインド硝子工場」の制作としている。『甦る光 横浜市開港記念会館ステンドグラス修復記念誌』横浜市市民活力推進局地域施設課・横浜市中区役所 編・発行、2010年、p.105。
- 15) 『横浜復興誌』第4編、横浜市役所、1932年、pp.730-731。
- 16) 横浜が開港したのは、安政6年6月2日、西暦では1859年7月1日であった。翌年同日、開港一周年を記念する祭礼が行なわれたのが横浜の開港記念日の始まりとされる。一時期西暦の日付が採用され、会館創建時

（1917年）には開港記念日の7月1日に開館式が行われた。その後、陰暦の日付を西暦の6月2日に充てて現在に至っている。前稿（1）（2）、本稿（3）の中で、論考の対象時期により、開港記念日の日付が異なるのは、このことによる。

- 17) 『横浜貿易新報』1927年6月2日、第2面。
- 18) 前掲『横浜復興誌』第4編、p.730。
- 19) 『横浜貿易新報』1927年6月2日、第1面。
- 20) 『横浜貿易新報』1927年5月8日、第2面。
- 21) 徳川宗家第16代当主・徳川家達は、1890（明治23）年より貴族院議員をつとめ、1903（明治36）年から1933（昭和8）年にかけて貴族院議長の職にあった。1917（大正6）年の開港記念横浜会館開館式では、大隈重信らと並んで祝辞を述べた。
- 22) 《山本内閣親任式の図》（宮内庁所蔵、昭和天皇記念館に平常展示）は結局9年がかりで1936（昭和11）年に完成、《憲法発布式》（聖徳記念絵画館所蔵）も同年完成した。いずれも和田英作の代表作として知られている。
- 23) 岐阜県歴史資料館所蔵、安藤東一郎より洋画家・熊谷守一（1880-1976）へ宛てた昭和2（1927）年7月1日付の移転通知から、当時、東京・高円寺に居を移したことが分かる（岐阜県歴史資料館 所在史料目録 第53集 熊谷守一文書目録 1 書簡類 その1（明治32年～昭和15年）文書番号1-217）。同館より、文面は印刷物、移転先は「東京府下杉並町高圓寺四百四番地」、日付は「昭和二年七月一日」、消印は昭和2年7月5日、とのご教示をいただいた。
- 24) 前稿（1）p.251（71）註38に記した、佐々成典・（旧姓有田）真木子『有田四郎とその周辺』1986年9月17日（私家版）（宮崎県立美術館所蔵）を参照。
- 25) 壁画の技法については、前稿（1）p.255（68）を参照。
- 26) 前稿（2）pp.351（64）-350（65）。
- 27) 前稿（1）p.256（67）。
- 28) フェリス女学院100年史編集委員会編『フェリス女学院100年史』フェリス女学院、1970年、p.226。
- 29) 前掲、秋山佳史「時計台80年 開港記念会館物語④」『神奈川新聞』1998年12月30日、第9面。
- 30) 『横浜市開港記念会館』横浜市開港記念会館、1981年、p.4。前掲『霧笛と共に 横浜市開港記念会館史』、p.88。
- 31) 前掲『横浜市開港記念会館ドーム復元工事報告書』、p.14。
- 32) 1969（昭和44）年9月以降、『神奈川新聞』掲載の開港記念会館保存問題に関する主要記事は以下を参照。

【報道記事】

- ・「保存か取りこわしか／横浜開港記念会館／解体移築の構想も／飛鳥田市長 広く世論聞き検討へ／絵の保存がきっかけ」9月2日、第10面。
- ・「開港記念会館保存を／横浜商議所観光委 きょう市長に申し入れ」9月6日、第12面。
- ・「どうなる開港記念会館／高まる横浜市民の関心／保存論大半占める／歴史的遺産の継承主張」10月14日、第11面。

【連続特集記事】 *（ ）内は記事掲載の肩書

- ・飛鳥田一雄（横浜市長）「保存か取りこわしか 岐路に立つ開港記念会館① 建築的には寿命だが」9月2日、第12面。
- ・寺田春弐（東京藝術大学助教授・美術評論家）「同上② 心のよりどころに」9月3日、第12面。
- ・加藤衛（横浜演劇研究所長）「同上③ 市民と薄いつながり」9月4日、第16面。
- ・野尻抱影（五島天文博物館理事）「同上④ “市の象徴” ぜひ保存」9月6日、第14面。
- ・森下一男（横浜市会議長）「同上⑤ 保存し市立博物館に」9月7日、第12面。
- ・李家孝（横浜商工会議所会頭）「同上⑥ 資料整備し博物館に」9月10日、第12面。
- ・佐藤美子（声楽家・市教育委員）「同上⑦ 改築し音楽の殿堂に」9月11日、第12面。
- ・平塚武二（童話作家）「同上⑧ 思い切って改築を」9月12日、第12面。
- ・吉沢忠（東京藝術大学教授）「同上⑨ 美術館にならないか 」9月13日、第16面。
- ・牧野イサオ（横浜文芸懇話会顧問）「同上⑩ 改装して美術館に」9月14日、第12面。
- ・河合正一（横浜国大教授）「同上⑪ 創造的に改修、保存を」9月17日、第12面。
- ・朝比奈貞一（県立養大教授）「同上⑫ 忘れるな開拓者精神」9月19日、第12面。

【投稿欄「自由の声」に掲載された市民の意見】（投稿者個人名は省略）

- ・「他に緊急課題がある／開港記念会館問題に一言」9月10日、第4面。
- ・「取りこわして新館建てよ」9月11日、第4面。
- ・「心のよりどころとして」9月11日、第4面。
- ・「あの場所にあの姿を」9月11日、第4面。

- ・「赤レンガへの郷愁」9月13日、第4面。
- 33) 註32、【連続特集記事】飛鳥田一雄（9月2日）。飛鳥田は1963（昭和38）年4月に横浜市長に当選、以後14年10ヶ月にわたって市長を務めた。
- 34) 八幡港二氏については、次の書を参照。伊東一夫『八幡港二の世界 画家の仕事』門土社、2014年。
- 35) 註32、【連続特集記事】飛鳥田一雄（9月2日）。
- 36) 註32、【報道記事】「保存か取りこわしか／横浜開港記念会館（以下略）」（9月2日）
- 37) 開港記念会館問題に関する3つの方向性に関しては、註32、【連続特集記事】森下一男（9月7日）も同様の主旨を述べている。
- 38) 註32、【連続特集記事】寺田春弐（9月3日）
- 39) 註32、【連続特集記事】李家孝（9月10日）
- 40) 註32、【報道記事】「開港記念会館保存を 横浜商議所観光委（以下略）」（9月6日）
- 41) 註32、【投稿欄「自由の声」に掲載された市民の意見】（9月10・11・12日）
- 42) 註32、【報道記事】「どうなる開港記念会館／高まる横浜市民の関心（以下略）」（10月14日）。
- 43) 前掲『横浜市開港記念会館ドーム復元工事報告書』、p.22。
- 44) 前稿（2）、p.348（67）を参照。
- 45) 前掲『横浜市開港記念会館ドーム復元工事報告書』、pp.16-17。
- 46) 『朝日新聞』2014年11月12日、第24面。

図版出典

- fig.41 『市政100周年 開港130周年 図説 横浜の歴史』横浜市市民局市民情報室広報センター、1989年
- fig.42・43 『開港150周年記念 横浜建築家列伝』展カタログ、横浜都市発展記念館、2009年
- fig.44 『関東大震災90周年記念 関東大震災と横浜一廃墟から復興まで』展カタログ、横浜都市発展記念館、2013年
- fig.45・46・47 財団法人文化財建造物保存技術協会編『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』横浜市教育委員会生涯学習部文化財課、2001年
- fig.48・52・53 『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年、横浜市中心図書館所蔵
- fig.49・50・51 筆者撮影
- fig.54 横浜開港資料館所蔵
- fig.55・56・57 フェリス女学院資料室所蔵

附記

本稿執筆にあたって、横浜市開港記念会館館長代行・山口達夫氏、フェリス女学院資料室・鈴木慶子氏、宮崎県立美術館・園田博一氏、山領絵画修復工房・山領まり氏、美術保存修復センター横浜・大西章夫氏、宇草圭司氏、田辺千代氏、平栗徳雄氏、八幡港二氏、横浜都市発展記念館、横浜市中心図書館、岐阜県歴史資料館、そのほか関係者の方々にご教示・ご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

*本稿中の「前稿（1）」は、『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』第21号、2013年、pp.266（57）-250（73）、「前稿（2）」は『同』第22号、2014年、pp.360（55）-341（74）の拙稿を参照。また、下記サイトより閲覧可能。

「明星大学学術機関リポジトリ」研究紀要・年報 明星大学研究紀要、日本文化学科 第21号（2013）／第22号（2014）

<https://meisei.repo.nii.ac.jp>

*本稿中の引用文は、仮名の一部を適宜現代仮名遣いに改め、漢字は適宜通行の字体に改めた。また、読みやすさを考慮し、適宜句読点あるいはスペースを補った。引用文中、難読箇所等には原文のルビを適宜残し、筆者が補ったルビや註は〔 〕で表した。